

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390100735		
法人名	医療法人山部会 くまもと成城病院		
事業所名	グループホーム響き		
所在地	熊本市北区室園町10-67		
自己評価作成日	令和7年3月9日	評価結果市町村受理日	令和7年5月23日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和7年3月15日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

入居者様が地域でいきいきと暮らしていけるように努力しております。令和6年6月には、コロナウイルスのクラスター発生してしまいました。感染対策をしっかりとしていきます。なかなか地域との交流ができていません。入居者様のADLやレベルの維持が難しくなっている。レクリエーションの時は、上下肢体操、口腔体操、脳トレ、施設の廊下を歩行訓練などを取り入れ、入居者様のQOLの実現に向けて努めております。入居者様の好きな歌う機会を増やしたり、ユニットを越えて、入居者様の交流ができるようにしている。どのようにしたら入居者様が日々、楽しく過ごしていけるか職員全員で考え、ケアに取り組んでおります。食事面では、寿司の日・麺の日・パンの日など行事食を準備し、楽しんで頂けるようにしております。敬老会・忘年会・誕生会など入居者様と職員だけで実施しました。地域の方やボランティアとの交流ができるようにしていきたいと願っております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設して16年という経年の中で、入居者の入れ替りや認知症の進行という現状もあり、ユニットによる介護度の違いが大きく、医療ニーズの高い西棟では毎月カンファレンスの開催によるケア統一、東棟では申し送りで見守りを徹底している。106歳・103歳と超高齢化しても車椅子の自操や手引き歩行等自立した生活ぶりに安全対策や転倒予防の徹底等職員のケアの確かさが表われている。また、東棟では歌が出るなど職員の関わり方次第で笑いや和やかな表情の他、無表情だった入居者の笑顔を引き出したことを職員の励みとしている。コロナ禍以降地域との関わりが希薄となっており、運営推進会議の再開により地域の中での生活拡充に期待したいホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所内に理念を掲げて、毎日の申し送り時に理念を読み上げサービスに反映しているか確認しながら実践に繋げている。	開設時からの理念を継続し、グループホームとにしての役割や入居者個々のニーズに即したケアに努めること、高齢者としての言葉遣いや繰り返しの言葉には受動する事等を説明している。西棟では毎月のカンファレンスを開催する体制、東棟では申し送りによる共有化としている。	職員の入れ替わり及び介護度や自立度等ユニットによる違い等もあり、ホームとしての目標等具体的な方針を掲げることが、全員が目指すべき方向性を示される事が期待される。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会費を納めている。地域の行事に参加できていない。	町内会への加入により自治会長から花見のお誘いは受けているが、感染対策を徹底する中で外出は控えている状況にある。暖かくなってくると散歩に出たり、自治会の花見にも参加する等徐々に近隣住民との交流していきたいとしている。	夕方のチリ出しに職員と出る入居者もおられるとのこと、外部者との交流としてまずは職員から再スタートしてみる等全員で検討いただきたい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域に向けての発信が出来ていない。何かできることを考えていきたい。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今回はできていない。1回でも開催していきたい。	運営推進会議は今年度は開催していない。	感染対策の徹底により開催が出来ない状況等により開催が難しい場合には、開催場所の検討により早期の開催が必須である。2ヶ月の一回以上の開催としてこれまでホームに関わりのある自治会長や地域包括支援センターささえりあ等に参加の依頼は開催方法を県検討いただきたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	ささえりあの職員と時々、情報交換は行っている。	地域包括支援センター(ささえりあ)には空き状況を提供する等の関わりや、今年度は実地指導を受けているが、必要最小限の関わりである。	行政との連携としてm運営推進会議の再開に向けてまずは相談することからスタートし、地域包括支援センターをはじめとして情報を集めるとよいと思われる。
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束については、研修を行い正しい知識を身につけ実践できるよう取り組んでいる。玄関の施錠に関しては、家族の要望や安全面から考えて施錠している。帰宅願望者が多い。	身体拘束廃止宣言を掲げたホームでは、身体拘束適正化委員会としてスピーチロック(言葉での抑制)やアンガーマネジメント等を話し合っている。特にスピーチに対しては言葉を変えて話しかける事としている。センサーマット使用については、ふらつき等身体の状態により使用するかどうかを判断するとして家族への説明及び同意書を交わしている。また、事故発生の可能性もあり、事故を防ぐために注意を払い観察を行うと家族へ説明している。	帰宅願望や不穏行動が強く離設の可能性が高いとして安全対策の一環として玄関口を施錠している。職員体制等により開錠する時間の検討や、外出傾向の高い入居者の所在確認や見守りを徹底されることが望まれる。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年4回の研修を行い、入居者の身体を常に確認し職員に聞き取りをする事で、現状を把握している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	年1回の研修で成年後見制度についての知識を学び必要な方には、かつようできるように準備している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は、ゆっくりとわかりやすく内容を説明し同意を得ている。不明な点があれば、その場で解決してもらえるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年1回の家族会議は、開催できませんでした。家族に連絡する際、事業所に対する意見や要望を聞き、サービスに活かしていけるよう努力している。	家族の訪問に合わせた情報報告や、入居者のいつもの違いには家族に報告し受診をお願いしたり、昼夜逆転になりそうな場合等家族に報告する体制としている。更に衣類等の過不足や衣替えの時期になると家族に声を掛けている。ホーム便りも途切れており、家族への情報発信源としては写真を郵送されており、今後は入居者個別に1ヶ月間の状況等をしたためて写真と共に郵送されるよう期待したい。	家族との交流する機会として運営推進会議への参加を依頼する等運営推進会議を問題提起の場とされることが望まれる。今後も家族の忌憚無い意見や要望等を収集しケアサービスに反映頂きたい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回のスタッフ会議を行い、行事の企画や入居者の個別処遇を通して意見や提案を出している。	各ユニット毎にカンファレンスを開催し、ケア統一に向け入居者の現状や職員の気づき等を話しあっている。職員から出された意見にはまずはやってみるとしている。忘年会として楽しみごと等を行ってみては等の意見が出され、非日常の楽しみ事として開催している。	全職員が情報を共有することが必要であると思われ、全体会議の開催に向けて検討いただきたい。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	コミュニティ会議では、職員の意見を聞く機会を作り職場環境の改善に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修には、できるだけ多くの職員が参加できるようなシステムを作り職員各自が業務やケアに活かせる取り組みを行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	代表者は、グループホーム連絡会に入会し横のつながりを持てるよして、管理者や職員が情報交換や勉強会などに参加できるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所時のアセスメントでは、本人の話をよく聞きこんごホームでどのようにして暮らしていきたいかを探る為、本人の真の声に耳を傾けて信頼関係が出来るように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の困っていることに耳を傾け不安や要望に応えられるような信頼関係が築けるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	今、何が必要かをしっかりと把握しサービスの内容を検討している。グループホームの中だけでなく家族の協力体制や病院、外部ボランティアの活用も検討している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者と職員は一緒に家事を行い、できないところは職員が手伝いながら共に過ごし支え合う関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族には、できるだけ面会に来て欲しい。玄関で面会できるようにしている。必要であれば、居室で短時間過ごして頂いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	なかなか地域の方との交流が難しい。スタッフが入居者と寄り添い関係を深めている。	外出を制限しており、馴染み場所へ出かける事は出来ていないが、お隣同士の入居者や同じ会社勤めだった等の他、入居して馴染みの関係が築かれた様子が垣間見られる。家族の訪問や家族との受診等家族が中心である。	今後の生活歴等の情報をリサーチし、入居により疎遠になってくるであろう馴染みの人との関係継続にホームとしてどう関われるか、関われることがないか等家族も含めて検討されることを望みたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者が孤立しないように常時声掛けして利用者同士がお互いに関わりが持てるような支援に努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後も家族と話したり、関係を断ち切らないよう努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の思いを把握するために会話し、何に興味がありどのように暮らしたいのかを汲み取るよう努めている。	職員は、入居者との会話により意向等を把握する他、意思疎通の難しい方には行動や笑顔をバロメーターとしている。入居者の言葉には否定せず、繰り返しの言葉にも受容する姿勢で臨み、言葉の裏にある真意を探りながら支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	毎日の会話の中から、生活歴や今まで暮らしてきた環境等を探り出していけるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの一日の過ごし方は、それぞれに違うので本人の能力に応じたケアができるよう現状把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員が一番本人の身近でケアを行っているため、それぞれの意見を出し合い家族の要望や訪問看護師の意見を取り入れて介護計画を作成している。	毎月ケアカンファレンスを開催し、介護保険更新における介護サービス内容の確認と現状報告及び家族の要望等について担当者会議を開催している。安全な生活を送る事や楽しく過ごして欲しいとする本人及び家族の思いをプランとしている。	定期的(半年毎)に担当者会議を行う事として家族の要望等を聞き取りするとしており、入居者及び家族に再度意向等を聞き取りしていただきたい。また、インシデント、アクシデントや入居者の状態変化には随時の見直しに期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録には、会話のひとつひとつを記録し本人がどんな思いでその言葉を発しているか検討してケアの見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	事業所は、本人とその家族を支えることを念頭に置き既存のサービスのみならず柔軟な支援が出来るように取り組んでいる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ボランティアによる慰問、ピアノの先生による音楽療法、併設の病院で行われる行事に参加し安全で豊かな暮らしを楽しめるように支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	併設の病院をかかりつけ医にしている入居者が多く、受診時に家族に付き添って頂いている。精神面を含めた体調管理が図られている。	全員が隣接する母体医療機関をかかりつけ医とし、定期的に家族やホームで受診に出たり、往診、服薬セットが行われている。また、法人の訪問看護を全員が受けており、職員にとっても心強いものとなっている。院外の医療機関受診については、家族の付き添いとしており、結果を共有している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職員から異常があれば看護師に報告し、必要時には病院受診している。2ユニットで週4回、看護師が訪問している		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院の連携室とは、常に情報交換し入退院時は必要な情報が把握できるよう連携をとっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居契約時、重度化、終末期について説明している。終末期のケアについては、家族の協力を前提とし、その都度家族は主治医と十分に話をするようにしている。	重度化された場合、看取り支援は行っていないため、主治医の判断で指針のもと対応している。また、医療が中心になられたらホームでの対応は難しいことを伝え、母体病院など今後の対応について話し合っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	同法人の病院での勉強会や医師による救急法の訓練を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	昼間、夜間を想定しての訓練を行っている。	昼間想定で火災通報訓練、夜間想定で玄関までの避難訓練が行われ、安全チェックは日中と夜間帯に表により確認している。備蓄は3日分をホームで確保されている。BCPは作成され職員への伝達も済ませているが、訓練までには至っていないようである。	今後は火災、自然災害の訓練を定期的実施され、有事に備えていかれる事を期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	ひとりひとりの人格を尊重し、声かけや接し方に配慮している。入浴、排泄の声掛けには、プライバシーを損なわないよう対応している。	管理者は何が一番喜んでもらえるか？を考え職員に伝えながら、入居者を人生の先輩として支援している。身だしなみやおしゃれについては好みの衣類の選択やモーニングケアは一日のスタートであり、特に丁寧に対応している。髪のカットは入居者や家族の要望を聞きながら支援している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	人生の先輩として敬意を表し、入居者の思いや訴えを傾聴、受容することを心掛けている。傾聴する時は、居室で行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ひとりひとりの要望を聞き、散歩、静かにすごしたい、テレビ視聴など、個人のペースで活動できるよう支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	2ヶ月に1回、理容業者に来てもらい散髪を行いおしゃれが出来るよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は、行事食など多彩なメニューがあり楽しみを持って食べることができるよう支援している。食器ふきや台ふきなど声掛けして手伝いをお願いしている。	ご飯のみホームで炊き、他の料理は本体病院厨房で調理されたものをキザミ(厨房)、ホームでカットする等個々に応じて提供している。1・15日の赤飯やお寿司の日、郷土料理(他県)、パンや麺類の日など多彩なメニューが用意されている。食事内容が本人の口に合わないことをハッキリ伝えられる方には、家族へ好みの差し入れを依頼し、少しでも満足してもらえるようにしている。入居者の中には食器拭きや台拭きなどを手伝われている。職員も希望で同じものを食べる事が可能であり、気づいたことがあれば、厨房へ声を挙げている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎食の摂取量を記録している。その人に応じたカロリーや減塩、糖尿食、嚥下移行食等に対応したメニューを提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、職員の声掛けや誘導で歯磨きやうがいを行い、口腔内の衛生を保つよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄に関しては、定期的に声掛けしトイレ誘導、見守りを行い、個別に対応している。	自立の継続や声掛け・誘導による排泄支援に努めている。日中は布パンツの方もおられるが、殆どの方がリハビリパンツにパットを併用されている。夜間はテープ式オムツに変更される方やポータブルトイレを使用される方もおられる。100歳を過ぎられても職員の手引き誘導でトイレに行かれるなど、残存機能を生かした個別支援に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	午前中は、なるべく体を動かし、おやつのはきはき、薩摩芋、お茶をこまめに提供し便秘予防に心掛けている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週2回入浴できるようにしている。個人の希望を聞きながら支援している。	同性介助への希望にも対応し、ゆっくり入浴してもらえるよう取り組んでいる。入浴は清潔保持はもとより出血などの皮膚状態を確認する機会として最低週2回の支援としている。ホームの浴槽は一般浴であり、身体状況からシャワー浴が中心の方もおられる。「寒いから入らん」と拒否をされる場合は、職員を交代したり、午後から再度声掛けを行うとゆっくり入られるなど、個々に応じて対応している。	入浴後の着替えを選んでもらったり、風呂上がりの髪の毛のセットで喜んでもらう等、ホームの工夫が聞かれた。今後も入浴が楽しみとなる支援に期待したい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	リネンは、定期的に洗濯や日干しするなどして安眠への支援している。また、眠れない方に対しては話を傾聴して対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬管理表で、個人の服薬状況を把握し症状に変化がある時は、看護師を通して主治医への連携を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	毎日洗濯たたみ、台拭き、居室の掃除など役割を持って手伝って頂いている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気のいい日には、近くの公園に出かけている。	6～9月のコロナクラスター発生後はやはり身体や認知機能の低下も見られ、外出支援は難しい状況だったようである。ゴミ捨てへの同行、天気の良い日は近くの公園に行ったり、母体病院の花壇を眺める機会はあるが僅かの支援に留まっているとしている。家族の協力で正月の帰省を予定されていた方もおられたが、感染症の状況から実現に至っておらず次回を心待ちにされていると思われる。	町内会からの行事案内が来ており、今後は参加できそうな入居者は少人数でもその機会を支援したいとしており、実現に期待したい。気候の良い時は入居者への外出の働きかけや家族の協力を得ながら希望に沿った外出支援やケアマネジャーも日光浴を兼ねた散歩に努めたいとしており、期待される。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	外出行事の際は、買い物ができるよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話を掛けたいようぼうがあれば行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	毎月、壁飾りを入居者と共に作成し、季節を感じてもらえるように工夫している。リビングでは、室温の管理に気を付けている。	玄関から左右に配置された東西ユニットは、現在入居者の介護度に関わり、ホール内の活動は見守りや入居者の意思を尊重した動きの支援など個々に応じて対応している。午前中のレクリエーションをはじめ日中はホールで過ごされており、西ユニットでは食後そのまま寛がれる方もおられたが、東ユニットでは女性入居者が来訪者に丁寧に挨拶や質問をされたり、入居者同士で賑やかに談笑される光景も見られた。ユニットの壁面はそれぞれが工夫し、入居者と一緒に作った作品が季節を醸し出している。	昼食後そのままの位置でやすまれている入居者が見られたが、居室へ移動しゆっくりとした態勢で寛いでもらうことが望ましいと思われ、検討いただきたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	椅子で過ごすことが好きな方やソファで居心地がいい方など、座席の配置など個人に合わせて配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた家具などを持ち込んでもらい馴染みの環境に近い状況で心地よく過ごせるように工夫している。	本人にとって心地よい空間となるよう馴染みの品の持ち込みを依頼している。居室にはタンスやクロゼットが備わっており、普段使用しない寝具や衣類などを収納する事が出来ている。また居室のドアには個人名や好きな花などを掲示し自室とわかるようにしている。感染症への対応から掃除や換気の徹底はもとより、必要に応じた消毒も継続し、衣替えの時期には家族にも協力を呼び掛けている。	コロナ禍は家族が居室へ入る機会は難しかったようであり、室内の様子は気になる点であったと思われる。今後家族が入室できない状況になった場合は、積極的に室内の様子や不足の品などホーム側から伝えていくことで安心に繋がるとと思われる。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室のドアには、好きな花や個人の名前を貼り自分の部屋がわかるようにしている。トイレやお風呂には、大きく書き貼付してわかるようにしている。		